

第5章 総括

第1節 笠見第3遺跡における弥生～古墳時代集落の変遷と構造

笠見第3遺跡は標高65～74mの丘陵上に展開する弥生～古墳時代の集落遺跡で、総面積30,000m²以上に及び調査が行われた。平成14・15年度の前回調査で既に大規模な集落遺跡であることが認知されており、今回の調査成果と合わせ弥生時代中期後葉～古墳時代後期中葉の竪穴住居は200棟、掘立柱建物は43棟にのぼる。小時期ごとの集落の変遷が追えるだけでなく、貯蔵施設や生産関連遺構も含め当該期の集落構造を多角的に検討することが可能な点では、県内でも有数の遺跡と評価されよう。

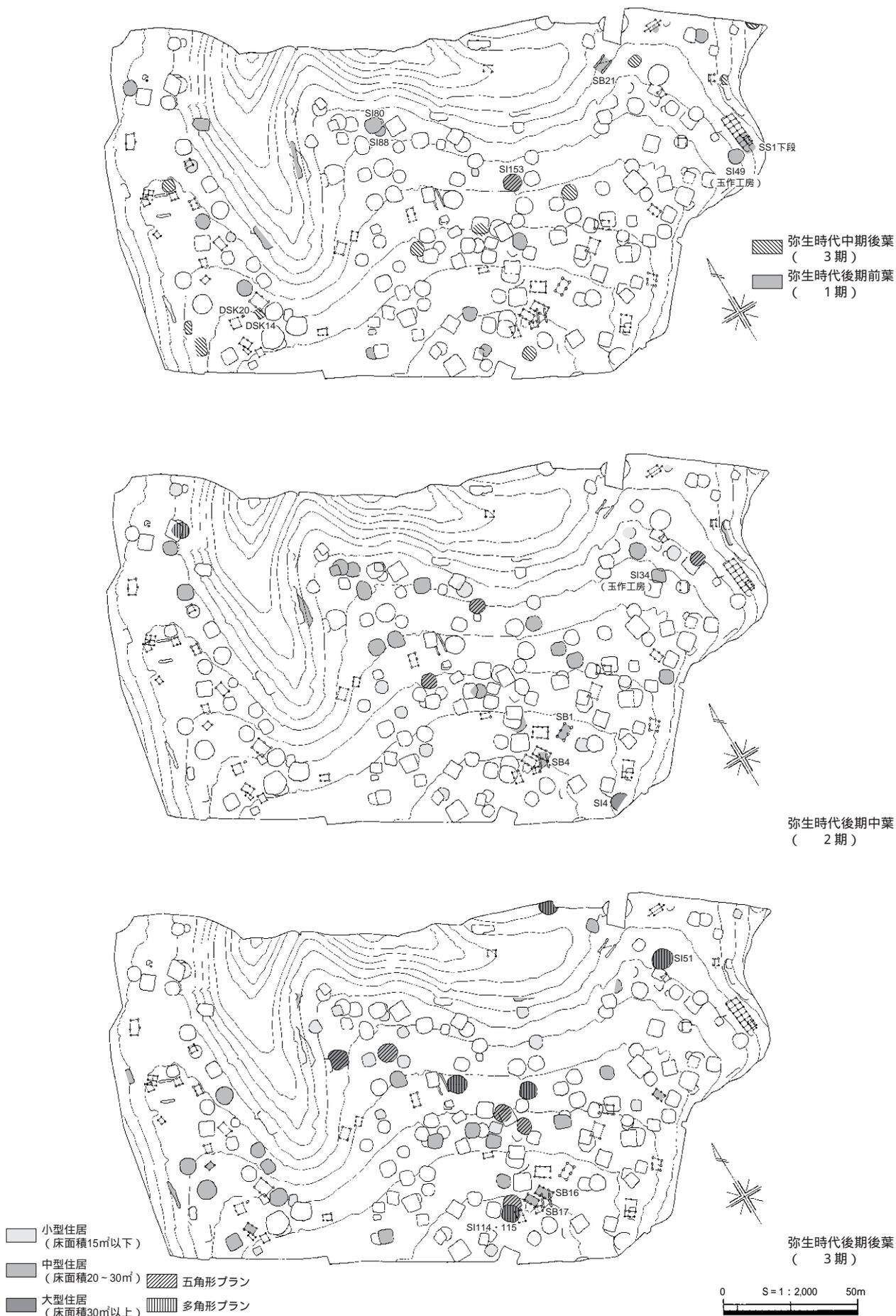
小稿では本調査で得られた新たな知見を加えて集落の変遷を改めて概観し、その構造を探っていく。なお、遺構名が重複するため本調査区検出遺構には「D」を付すこととし（DSI9など）、時期区分及び建物規模の分類等については前回の調査成果〔牧本2004〕に統一する⁽¹⁾。

（1）弥生時代集落の変遷（第201図）

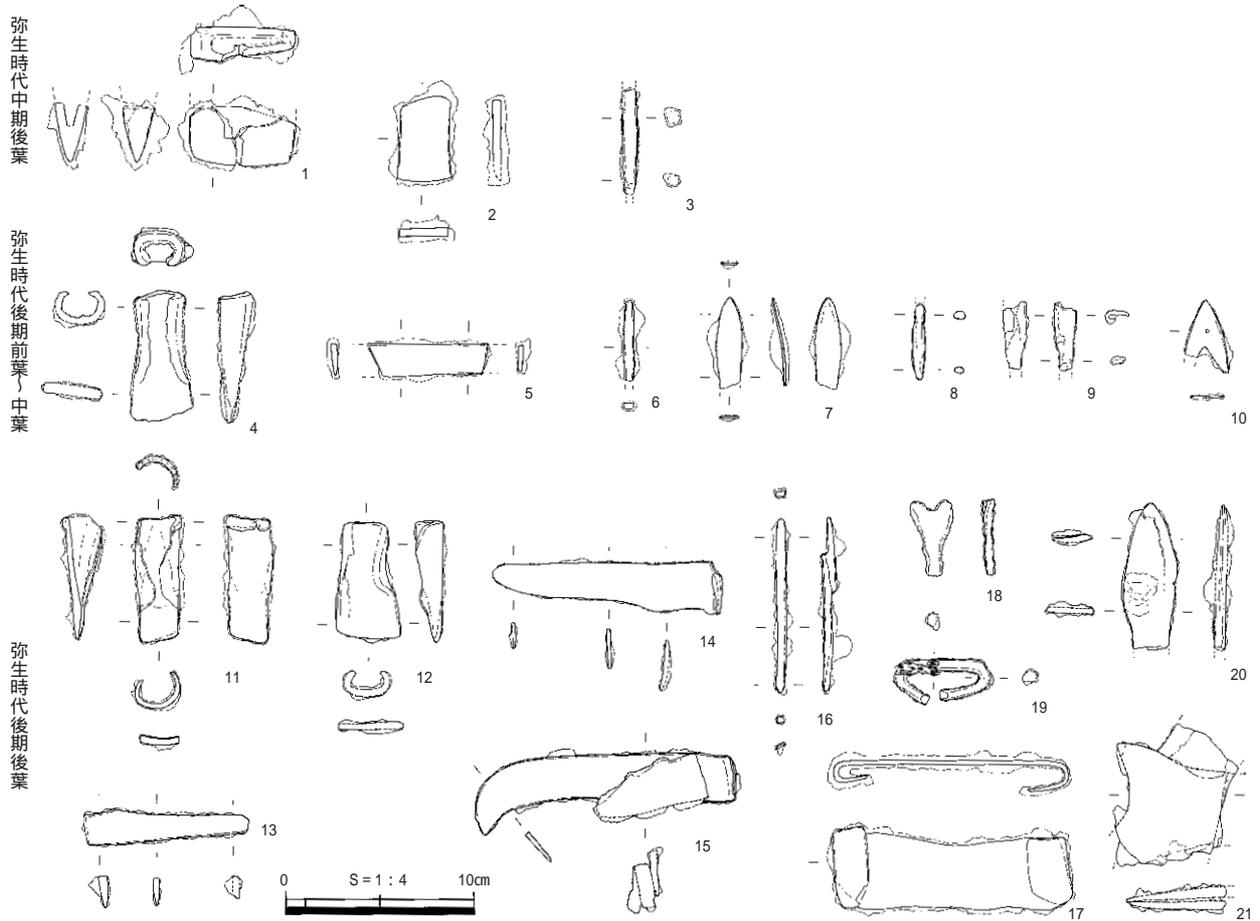
弥生時代中期後葉（Ⅳ 3期） 丘陵上に集落が形成され始める段階で、検出範囲で大きく3つのブロックが認められる。中央部では並列する住居間に貯蔵穴と想定される土坑が小ブロック状に築かれ、廃絶後にはSK65やDSK14・DSK20などのように多量の土器が一括投棄される。DSK14下層出土土器は当該期の一括資料で、大半の個体が煤や二次的な被熱痕跡を顕著に残す。これらは集落における共同炊餐後に廃棄された可能性があり、DSK20で大型の広口壺や胴部穿孔が施された吉備系の丹塗長頸壺〔松井1997〕などに伴って多数出土した手づくねの小粘土塊も同行為に供される性格をもつと推測する。西側尾根には貯蔵穴やテラス状となる小型の竪穴が構築され、西斜面には単独だが木棺墓が存在する。この時期の墓域が居住域に近接した後背斜面部に形成されている可能性もあるだろう。

弥生時代後期前葉（Ⅴ 1期） 尾根全体に住居が展開・構築される。東尾根では住居が尾根筋に沿って環状に配され、東西2つのブロックが認められる。各ブロックには中型の多角形住居が存在し、それらが周囲に展開する中～小型の円形住居群の核を成すと考えられ、中・小型住居が近接して2棟一単位のパターンが見られる〔牧本2004〕。都合3度の建て替え関係にあるSI80・88からは赤色顔料の付着した磨石や礫が出土しており、その性格も含め踏襲性の高い建物であった可能性がある。一方、東側ブロックの中核には玉作工房SI49があり、同一ブロック内にあるSS1下段テラスも玉作関連の遺構と推定されている。北側の谷頭付近に布掘り掘立柱建物SB21が構築されるなど、特異な属性を有すブロックと評価されよう。西側尾根の住居群は尾根筋に沿って列状に展開し、谷に近い傾斜変換ラインに立地する傾向が窺える。

弥生時代後期中葉（Ⅴ 2期） この段階に比定される竪穴住居は34棟を数え、前段階から倍増している。東側の住居ブロックは範囲を狭め密集形態となり、同時並存住居は2～3棟で引き続き玉作工房SI34が配される。A区に広がる中央ブロックは空地を囲み細長い環状に展開し、その西側に小型住居が列状に並ぶ。中央ブロックには埋土中資料だが鉄器やガラス小玉が集中する傾向が看取され、集落の中でも中核的なブロックに相当すると考える。ブロック内を細かく見ると、同規模・プランの住居が2棟近接する（SI73・77、SI66・68など）状況が認められるため、2段階程度の変遷を経ているものと推測する。後背緩斜面にSB1・布掘り掘立柱建物SB4が構築される。その南東側のSI4は東半



第201図 集落変遷図(1)

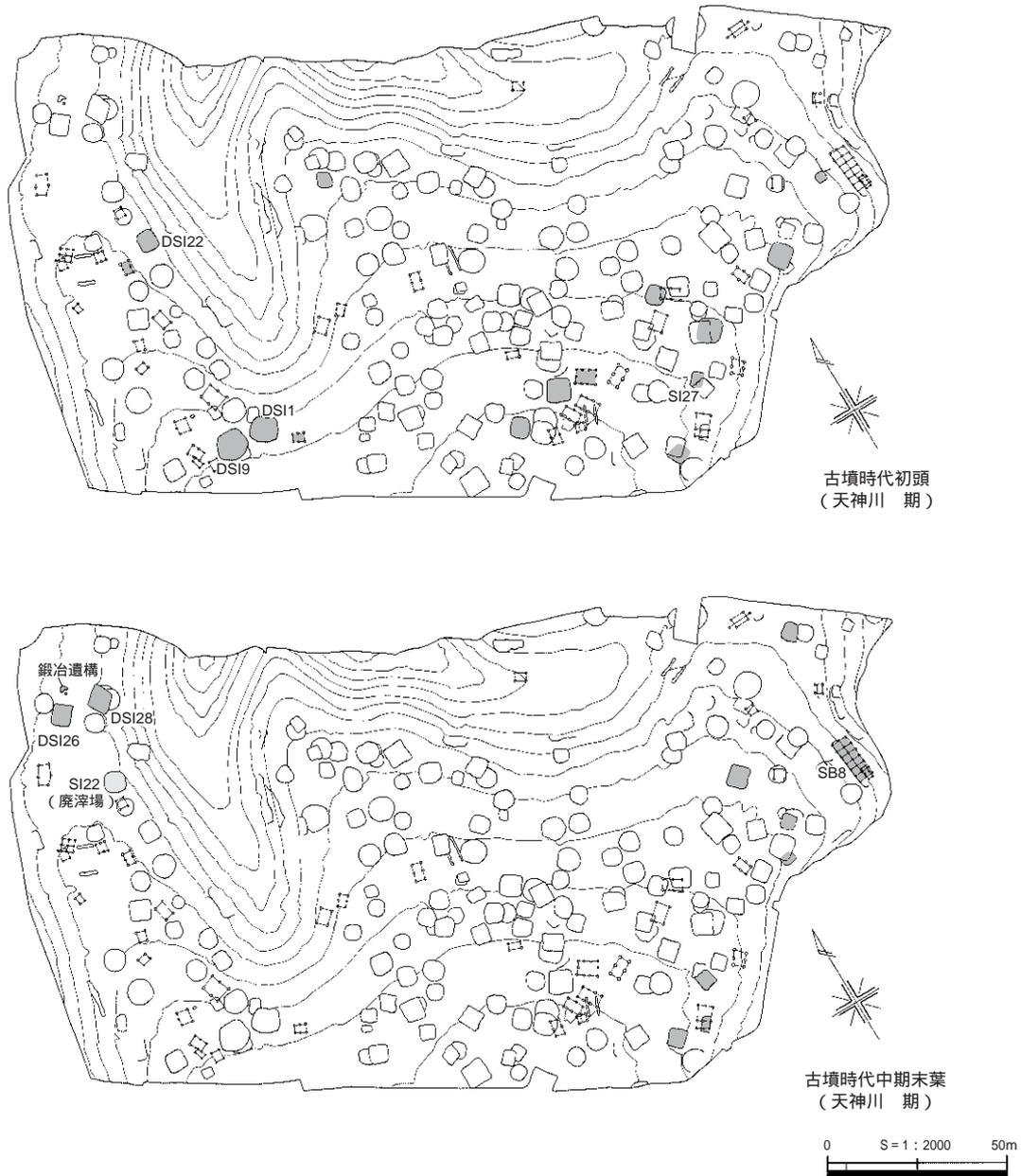


第202図 弥生時代中期後葉～後期後葉の鉄器組成

の床及び壁を流失しているが本来的には多角形プランの大型住居となろう。同段階における多角形プランの大型住居はSI4のみで、中央ブロックや掘立柱建物との関係は重要である。西側尾根のブロックは中央ブロックから離れ尾根北側にまとまる。

弥生時代後期後葉（V 3期） 集落は最盛期を迎え、住居が構築されたブロックは大きく3つに分かれる。前段階まで継続して玉作工房が築かれた東側ブロックには本遺跡最大規模のSI51が尾根緩斜面中央に構築され、両側の傾斜変換点に中型の住居が配されるが散在状態にある。A区中央ブロックは北へ張り出す尾根筋に沿って住居が構築されており、鑿・刀子・鉋等の鉄製工具や敲石を多数保有する状況は前段階と変わらない。西側ブロックは尾根平坦面から谷頭付近にまとまる傾向が認められ、前段階と異なり尾根北側へ展開しない。密集する住居群は周堤幅等を考慮すれば同時並存とみなし難く、同規模・プランを指向し隣接位置にある住居の中には先後関係にあるものが含まれると推測される。配置を概観すると、円形・多角形大型住居を軸に五角形中型住居と中～小型の円形・隅丸方形住居が周囲に配される状況が看取され〔高尾2005〕、それらが本集落における当該期の居住単位〔高田2003〕と想定する。中～小型の円・隅丸方形住居に敲石や赤色顔料関連遺物、鉄器・鉄器片が集中する状況は大型の多角形住居のそれと対照的であり、住居（建物）の性格が異なる可能性も考えなければならない。尾根高所に位置する中・大型住居SI114・SI115と、主軸を同じくして並列するSB16・SB17などはセット関係にあり建て替え移動を行ったものと推測され、他の状況からも全体で2段階以上の変遷は経ているとみることができよう。

弥生時代終末の様相は前回の調査成果と変わらない。集落規模は縮小している可能性が高い。



第203図 集落変遷図(2)

(2) 弥生時代集落の構造

本集落は弥生時代中期後葉から漸次拡大し、同後期後葉で最盛期を迎え終末期に大きく規模を縮小するという変遷を辿り、それは周辺地域に展開する集落遺跡の様相に合致する傾向といえる。

集落の形成期にあたる中期後葉の遺構は少数だが尾根全体に広がっており、この段階から一定の規模を有す集落であった可能性がある。吉備系の丹塗長頸壺や鋸歯状の赤彩を施す大型壺など中国山地を経由した地域間交流が窺える資料が出土しており、わずかだが良質な鉄器を保有している点も見逃せない。山陰地方全体でも中期後葉以前の鑄造鉄斧は希で、本遺跡周辺では青谷上寺地遺跡・西高江遺跡にしかみられず⁽²⁾〔池淵2005〕、そうした希少な外来物資を入手可能な立場にあったと考えられる。後期前葉には東側に形成された住居ブロックを中心として緑色凝灰岩を用いた玉作が始まっており同ブロックで継続して小規模な玉生産が行われるが、その素材の獲得ルートを確保していた点も重要であろう。しかし、後期後葉以降は東側のブロックから玉作の形跡が消えて住居ブロックが再編され、大型の多角形住居を中心として中小の円～隅丸方形住居を配す単位を基軸とした集合体へと構造

が変化しており、ここに集落の変遷における一つの大きな画期を認めることができる。それは例えば鉄器組成においても看取され、当該期には多数の鉄器を保有し、良質な搬入品（第202図11・14・15等）と素材鉄器（片）の再加工（同12・19～21）を中心とする鉄器生産³⁾をもとに利器の鉄器化がほぼ達成されている。中央ブロックにおける外来物資の集中や掘立柱建物の占有化傾向といった素地は後期中葉から認められ、居住単位も中小型住居2棟1単位のセットから中型の多角形住居を中心とする構成に移行しつつあるなど、複数の要因から構造の変化が徐々に進行したと想定する。ただ、希少品を独占し大型建物を領域内に占有するような突出した単位は見られず、集落内の階層分化等がどの程度だったのかは検討の余地が残る。大山東麓にあたる丘陵台地上には笠見第3遺跡のほか尾根ごとに集落が形成されているが、その消長や構成は一様でない。笠見第3遺跡は弥生時代中期後葉から続く集落であり、初期段階から吉備系土器が散見される⁴⁾ほか、玉素材や鉄器・ガラス玉といった外来物資の獲得においても他集落より相対的に優位であったことが窺える。以上より、本遺跡における弥生集落は小地域における拠点集落と考えられ、その初期から拠点性を維持していたと評価できよう。

（3）古墳時代集落の変遷と集落内鉄器生産

古墳時代集落の状況については今回の調査で新たな知見を得た古墳時代初頭と中期末葉の2時期に絞って詳述する。

表58 笠見第3遺跡主要要素一覧表

種類		鍛錬	
分析資料	鉄滓	KAS3 1 (TiO ₂ 0.37)	
		KAS3 2 (TiO ₂) 0.19	
		KAS3 3 (TiO ₂ 0.19)	
	鉄塊系遺物	KAS3 4	
	粒状滓	KAS3 5	
	鍛造剥片	KAS3 6	
統計遺物	遺物全体構成比 (総重量比)	総重量：3556 9g；椀形鍛冶滓2595 3g (72.97%)、鍛冶滓175 5g (4.93%)、鉄塊系遺物4.7g (0.13%)、鉄製品72 4g (2.03%)、炉壁8 5g (0.24%)、粘土質溶解物460 9g (12.96%)、羽口239.6g (6.74%)	
	粒状滓	鍛冶遺構：87 2g (40,600個) SI28：1 g (80個)	
	鍛造剥片	鍛冶遺構：7167 3g SI28：69 2g	
	鍛冶具	鉄床石 4 (19790g) 砥石または磨石 9 (19244g) 被熱石 1 (990g) 鉄滓付着礫 1 (240g)	
遺構	鍛冶遺構	平面規模	南北4.8m・東西2.8mの範囲に鍛冶炉1基、土坑2基、ピット2基を配す
		鍛冶炉	掘り方：長軸60cm×短軸50cm・深さ10cm 被熱範囲は炉中央部の径25cm・下部7cm
		SK27	掘り方：長軸1.2m×短軸0.94m・深さ46cm 「鉄床石の設置穴」の可能性
		SK27 2	掘り方：長軸2.2m×短軸1.1m・深さ10cm 「工人の足入れ穴」の可能性
		ピット	P185：径40cm・深さ44cm、P251：長軸38cm×短軸32cm・深さ24cm
		鉄床の位置	遺物分布及び鍛冶炉との位置関係からSK27と推定
		工人の位置	遺物分布からSK27 2周辺と推定
		遺物分布	廃棄土坑となったSK27に局所的に集中するほかは、SK27 2南半部と鍛冶炉西側付近に分布
	時期	古墳時代中期末葉（天神川編年Ⅸ期） 周辺遺構における鍛冶関連遺物共伴土器による ¹⁴ C年代測定結果 試料1：AD340～540年、試料2：AD420～550年	
	SI28	平面規模	長軸6.2m×短軸5.8m・深さ31cmの方形を呈す竪穴住居、床面積推定31.7m ²
鍛冶炉		平面径20cm・深さ9cm程度、上面のみ被熱・吸炭し硬化	
遺物分布		上面に炭化物層が広がり、同層から微量の粒状滓・鍛造剥片を回収	
時期		古墳時代中期末葉（天神川編年Ⅸ期） 床面出土土器による	
遺構の性格	<ul style="list-style-type: none"> 鍛冶遺構では鍛錬鍛冶作業を中心とした操業が行われていた。 鍛冶炉は鍛錬鍛冶炉で焼け方が弱く、鉄滓は概して小さい。操業内容は小型製品の製作・補修等と推定される。 工程的には高温鍛接から低温素延べ成形までの作業が推定され、脱炭も行われた可能性を示す遺物が出土している。 SI28は鍛冶工房の可能性もあるが、その操業は短期間かつ小規模なものだったとみられる。 出土した鍛冶具のセットも必要最小限で村方鍛冶的であり、出土した鍛冶関連遺物の総量から推測すれば集落で使用する農具を賄うような操業であったと考える。 		

古墳時代初頭(天神川Ⅰ期) 縮小傾向にあった弥生時代終末の集落からやや微増となる住居群は、尾根中央に広い空閑地をもち大きく東西の2ブロックに分かれ、大型建物と掘立柱建物がセットになって構築される状況が認められる。西側尾根の谷頭付近に大型住居DSI9、隣接位置には大型住居DSI1(=A区SI127)が築かれる。DSI1・DSI9とも2~3回の建て替えを行っているが、位置関係からすれば同時並存は困難とみられ、集落の造営にあたって大型住居をこの場所に継続して構築しなければならない空間的理由があったとも推測される。両遺構では敲石・台石と鉄器片・鉄片の出土が目立つが、竪穴内に生産の明確な痕跡は窺えない。しかし、東側ブロックのSI27で鍛冶炉と考えられる焼土面と鞆羽口が確認され、西側尾根のDSI22bで鍛冶滓の可能性のある鉄滓が出土していることも勘案すれば、この時期に鑿切り・折り曲げ加工を主とする低温鍛冶から脱却し、高温下での鍛冶作業が集落内で行われていたと推定されよう。

古墳時代中期末葉(天神川区期) 幅広な尾根の東端に列状に展開する住居ブロックと、西側尾根の鍛冶遺構を中心とするブロックに明確に分かれる。鍛冶遺構の操業時期は周辺遺構出土土器から当該期に比定され、鉄滓の法量や羽口の形態的特徴、鉄床石の使用状況等は時期的な特徴を反映している⁽⁵⁾。鍛冶遺構に隣接するDSI28も粒状滓や鍛造剥片が出土した住居で鍛冶炉の可能性のある炉を有すなど、近接位置に関連施設が集中しており、そうした様相は工房域として評価できると考える。調査区外の状況が不明ながら、鍛冶工房は居住域から離れた場所に配されたと理解でき、当該期の鍛冶工房の特徴をもつ〔村上1998〕。DSI26は単なる住居ではなく、例えば工人の控え小屋だった可能性もあるだろう。同時期には居住域東縁の斜面部に桁行6間×梁行2間の大型掘立柱建物SB8が庇か柵状の施設を伴って構築されており、鍛冶工房との関連も注目される。鍛冶炉及び周辺施設においては、高温鍛接から低温素延べ成形に至るまでの作業が行われ、鍛冶関連遺物の総量などからすれば集落内で使用する小型農工具の製作や補修を主とする村方鍛冶的な操業であったと推測される(表58)。ただ滓量に比して7kg超という多量の粒状滓・鍛造剥片が出土している点は看過できず、鉄滓等の実際の生成量はさらに多量であった可能性もあり(P.170表29参照)。操業規模については類例の状況も踏まえたうえで改めて評価したい。鍛冶炉及び「鉄床石の設置穴」等の関連土坑は竪穴内ではなく屋外に構築されているが簡易な上屋を設けて作業を行っていたと想定され⁽⁶⁾、操業期間は長くなかったと考える。(高尾)

註

- (1) 建物規模による区分は、床面積50㎡以上を超大型、30~50㎡程度のものを大型、20~30㎡程度のものを中型、15㎡以下のものを小型建物としている〔牧本2004〕。時期区分については凡例を参照されたい。
- (2) 鑄造斧の可能性も想定された茶畑山道遺跡例については層状剥離の進行と形態的な特徴から鍛造品と考えている。
- (3) 第202図1は近年出土例が増加している九州系袋状鉄斧で、本遺跡周辺では中道東山西山遺跡・笹津乳母ヶ谷第2遺跡(袋状ノミ)〔大川・濱本2007〕で出土している。また、19は素環頭刀子の裁断された環頭部、20は鉄剣の再加工品である可能性が高く、21も素材となりうる良質の大型板状鉄器片である。以上は資料を実見の上判断した。
- (4) 本報告145や164等が該当するが、164については吉備南部地域からの搬入品とはみなし難く、例えば吉備北部地域(山間部)などからの搬入・模倣土器である可能性も考慮される。以上は松井潔氏に御教示いただいた。ただ、本遺跡で吉備系土器の動態が追えるのは後期前葉までで、後期中葉~終末期の外來系土器の様相は明らかでない。
- (5) 穴澤義功氏に御教示いただいた。
- (6) 穴澤義功氏、高田健一氏に御教示いただいた。

【参考文献】

- 池淵俊一 2005「安来市越峠遺跡出土鑄造鉄斧片をめぐる諸問題 山陰の鑄造鉄斧」『季刊文化財』第110号
 大川泰広・濱本利幸 2007『笹津乳母ヶ谷第2遺跡1』鳥取県埋蔵文化財センター
 高尾浩司 2005「中道東山西山遺跡における弥生時代集落の構造」高尾浩司・小口英一郎編『中道東山西山遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
 高田健一 2003「妻木晩田遺跡における弥生時代集落の復元」馬路晃祥編『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2002』鳥取県教育委員会
 濱田竜彦 2003「伯耆地域における弥生時代中期~古墳時代前期の集落構造」『日本考古学協会2003年滋賀大会資料集』日本考古学協会2003年滋賀大会実行委員会
 牧本哲雄 2004「笠見第3遺跡の集落変遷と建物配列パターンから見た集落構造の復元」牧本哲雄編『笠見第3遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
 村上恭通 1998「Ⅲ章 民衆の鉄、王の鉄 古墳時代」『倭人と鉄の考古学』青木書店

第2節 笠見第3遺跡における赤色顔料関連遺物

笠見第3遺跡からは赤色顔料の付着した石杵や台石が出土している。また赤褐色をした石状の塊が多数あり、これらには割ったり研磨した痕跡があることから赤色顔料の素材ではないかと想定した。こうした遺物から、本遺跡では赤色顔料の生産や使用を行っていた可能性が考えられたため、関連する遺物を整理し、まとめてみた。

顔料の種類については、自然科学分析によりベンガラの可能性が指摘された(第4章第2節)。調査を進めていく課程で、異なる時期の遺構から関連遺物が出土したので、長期にわたる赤色顔料生産が行われていたのではないかと考え、弥生時代中期後葉、弥生時代後期、古墳時代前期初頭の各時期について赤色顔料が付着した石器類、顔料素材と思われる塊、赤彩土器を抽出し、蛍光X線分析を行った。それぞれの構成元素が一致し、同じ種類のものであることが確認されれば、本遺跡で赤色顔料素材を入手、加工し、塗彩していたことが判明するのではないかと期待したからである⁽¹⁾。結果的には1点を除きベンガラの可能性が指摘されたので、出土した赤色顔料関連遺物は一連のものとして扱う⁽²⁾。ただ分析方法は蛍光X線によるもので、確実な同定に至っていないため、顔料をベンガラと断定的に記述せず、「赤色顔料」と呼称する。

関連遺物の概要

ここでいう関連遺物とは赤色顔料が付着した石器類と顔料素材と思われるものである。赤彩された土器も関連するものではあるが、個別にはふれない。石器類には台石、石杵、赤色顔料が付着した礫がある。台石とは大型扁平礫の広い面に赤色顔料が付着しているもの、石杵とは棒状礫の小口面あるいは敲打痕の認められる部位に赤色顔料が付着しているものを指す。これらは赤色顔料の破碎、磨り潰しに用いられたものと考えられる。赤色顔料が付着した礫は、用途的には明らかでないが、礫の形状や付着状態からすると、赤色顔料生産に関わったであろうものと二次的に付着したものがあると思われる。素材と思われるものは赤黒い塊状で、色が濃く緻密な部分と色が薄く軟質な部分がサンドイッチ状になったものである。分割や研磨など人為的な加工が加えられていることや、自然科学分析でもベンガラの可能性が指摘されていることを積極的に評価し、顔料素材と位置づける。

関連遺物のうち主要なものを第204図から第206図に掲載した。以下、個別に観察結果を記載する。通し番号とともにS番号が付してあるものは第3章にも掲載しているものである。

第204図1、2は弥生時代中期後葉の遺構から出土したもの。1はSS2出土の台石。もとは表面全体に赤色顔料が付着していたと思われるが、縁辺を中心に残存している。中央部は平滑になっている。自然科学分析資料38である。2はSI21出土の顔料素材。表裏両面に研磨が加えられる。分析資料42。

3から14及び第205図29、30は弥生時代後期前葉の遺構から出土したもの。3から5はSI12出土の顔料素材。3は分割によってサイコロ状を呈する。4、5は色の濃い緻密な部分を残すように、表裏両面の軟質部分を研磨している。6はSK39出土の扁平な自然礫である。部分的に赤色顔料がこびりついているが二次的なものと思われる。7もほとんど緻密な部分のみ残るように研磨されている。SI18床面出土。8から14はSI27から出土した。8は小型で扁平な円礫の表面に赤色顔料が付着している。付着範囲は広いが、自然面の細かな窪みに入り込んだものが残っている状態である。9は扁平な棒状礫の下面に赤色顔料が付着する石杵。顔料の残りは悪い。器体の表裏両面は平滑に研磨されてい

る。床面から出土したものである。10は棒状の垂円礫の下面（小口面）と表面中央に赤色顔料が付着している。残りは悪く、自然面の細かな窪みに入り込んだものが残っている状態である。11は棒状の垂角礫を用いている。小口面に付着した赤色顔料は良好に遺存している。10、11ともに床面からわずかに浮いた位置で出土。12は扁平な礫が割れたもの。部分的に赤色顔料が付着しているが、二次的なものと思われる。割れ面にもわずかな付着が見られる。13、14は顔料素材。13の裏面は軟質な部分と緻密な部分の境目に沿って分割された面である。上下左右はすべて裏面側からの分割面。分析資料43。14は握り拳状の塊で、一部に裏面側からの剥離が加えられているほか、部分的な研磨が見られる。SI27の東側壁溝を埋める土から出土しており、ほぼ床面に近いといえる。29、30はSI13出土。29は棒状礫の下面に赤色顔料が付着した石杵。床面ではないが埋土の下層から出土している。30は大型の不整形な礫を用いた台石。表面に赤色顔料が付着している。床面の出土。

第205図15から28は弥生時代後期中葉の遺構から出土したものである。15、16はSI20出土。15は卵形の楕円形礫のほぼ全面に赤色顔料と思われるものが付着している。液体に浸ったような付着で、水に溶け出した土中の鉄分が付着した可能性もあるが、ここに掲げた。16は分厚い顔料素材。裏面は軟質な部分と緻密な部分の境目に沿って分割されている。表面の一部を研磨する。17から23はSI24出土。17は卵形の楕円形礫の下面と表面の一部に赤色顔料が付着したものの。18は大型の扁平礫を用いた台石である。中央付近は窪み、粗い擦痕が見られる。ここに赤色顔料が付着している。右側面と下面は割れた面であるが、下面にも赤色顔料が付着しているので、この形状で使用されていたと思われる。床面から出土。19から23は顔料素材で、22までは加撃により分割されたもの。23は表裏両面に研磨を施している。これにより軟質部分がほとんどなくなっている。23のみ床面出土。24から26はSI25から出土したもの。いずれも顔料素材で、24、25は加撃により分割したもの。26も分割されているが、緻密な部分がほとんど見られず、裏面は研磨されている。27、28はSI30出土。27は小型扁平礫の表面に赤色顔料が付着している。遺存状況は良好である。床面出土。28は側縁を分割し、裏面は研磨された顔料素材である。

第206図31から37は弥生時代後期後葉の遺構から出土した。31から34はSI10から出土。31は下面に赤色顔料が付着している。敲打痕が顕著な敲石に付着が見られるものは例外的である。付着部位から二次的なものとは思えず、石杵としておく。32は大型の垂角礫の表面に赤色顔料が付着する台石。31、32ともに床面出土。33、34は顔料素材。34は研磨が加えられる。35はSI14出土の顔料素材。2点が接合した。この2点に分割後、右側の資料には接合面を打面とする加撃が加えられている。36、37はSI11出土の顔料素材。36は表面下半に一部研磨痕がある。37は左側面以外は研磨により平坦な面となっている。

38はSI8出土。弥生時代終末の遺構である。棒状礫の下半部に赤色顔料が付着している。壁溝埋土からの出土。

39から42は古墳時代前期初頭の遺構から出土した。39から41はSI1出土である。39は小型で下端部がバチのように広がる棒状礫を用いた石杵である。下面に見られる赤色顔料の残りはよい。分析資料36。40は加撃により分割された顔料素材。分析資料44。41の顔料素材は、裏面は軟質な部分と緻密な部分の境目に沿って分割され、表面も軟質部分がほとんどなくなるほど研磨されている。42はSI9出土。器体上半を欠失する。左側面に敲打痕とともにわずかな赤色顔料の付着が見られる。使用部位が小口面ではないが、石杵としておく。

43は南側丘陵部の西斜面から出土した赤色顔料が付着した礫。小型扁平円礫の表面に残っている。

関連遺物の所属時期

関連遺物の内訳と出土した遺構を時期別に整理すると次のとおりである（詳細は表59）。

弥生時代中期後葉（Ⅳ 3）	2遺構から台石1、顔料素材1
弥生時代後期前葉（Ⅴ 1）	6遺構から石杵4、台石1、付着礫3、顔料素材16
弥生時代後期中葉（Ⅴ 2）	4遺構から台石1、付着礫3、顔料素材16
弥生時代後期後葉（Ⅴ 3）	8遺構から石杵1、台石1、顔料素材20
弥生時代終末（Ⅵ 1）	1遺構から付着礫1
古墳時代前期初頭（天神Ⅰ）	2遺構から石杵1、顔料素材5
古墳時代中期末葉（天神Ⅲ）	2遺跡から顔料素材5
古墳時代以降	1遺構から顔料素材2
遺構外	付着礫1、顔料素材8

これらの多くは埋土中の出土で、関連遺物が床面から出土し、かつ、ある程度のセットを有しているものは、石杵3点と顔料素材のうち1点が床面またはそれに近い位置から出土したSI27、台石が床面、石杵が埋土下層から出土したSI13、（ともにⅤ 1）台石と顔料素材のうち1点が床面から出土したSI24（Ⅴ 2）、石杵と台石が床面から出土したSI10（Ⅴ 3）である。笠見第3遺跡で赤色顔料の生産を行っていた時期として確実なのは、弥生時代後期前葉から後葉といえる。

平成14、15年に行われた調査でも赤色顔料が付着した礫などが出土している⁽³⁾。床面からの出土例は弥生時代後期前葉に属するSI42の1点のみで、他は埋土中のものではあるが、多くは弥生時代後期前葉から後葉の遺構から出土しているのは今回の調査と同様である。古墳時代中期の住居から出土したものもあるが、弥生時代後期後葉や古墳時代前期初頭の住居を切っており、混入の可能性が高い。

赤色顔料の生産と使用について

ここに掲げた関連遺物から、赤色顔料生産の具体像を提示することは困難である。顔料素材も遺跡近傍で簡単に入手できたものか、焼成など素材に手を加えているのかといったことも明らかにできていない。ここでは顔料素材等の観察から指摘できる点を述べるにとどめたい。

顔料素材は赤黒い塊または板状で、色が濃く緻密な部分と色が薄く軟質な部分がサンドイッチ状になったものである。13、14のような大きめのものを、35の接合資料に見るように分割し、質の違う部分に沿って割っていたものと思われる。こうして割り取ったものを石杵で粉碎したのではないか。あるいは顔料素材に研磨痕が見られる場合があるので、研磨により粉末状にしたことも考えられる。両面を研磨して薄い板状になったものは、緻密な部分のみが残った状態なので、顔料として用いられたのは色が薄い軟質部分であったと思われる。

赤色顔料が付着した礫は、二次的に付着したと思われるものを除き、小型の棒状礫または扁平な円礫であることが多い。前者は小口面や器体下半部に、後者は表面の広く平坦な面に、ともに面的に付着する点が特徴であり、赤色顔料の磨り潰しなどに用いられた可能性がある。

平成14、15年度に調査を行ったのは、今回の調査区とは浅い谷を隔てた東側丘陵部である。前回調査で出土した関連遺物の多くは、ここでいう赤色顔料が付着した礫で、石杵や台石は報告されていない。

い。積極的な根拠はないが、赤色顔料生産が工程ごとに場所を変えて行われていた可能性を考えておきたい。

赤色顔料の生産規模であるが、顔料素材はすべて集めてもコンテナ1箱ほどであり、大量に出土したとはいいがたい。現時点では赤色顔料をここで集中的に大量生産していたわけではなく、集落内で使用する程度の生産であったものと考えておきたい。

赤色顔料の使用については、土器に塗る、墓に撒くなどが考えられる。SI17で出土した口縁部から肩部にかけて縦方向に塗彩した壺69のような独特の塗り方をするものもあり、赤彩土器は集落内で塗彩されていたものと思われるが、青谷上寺地遺跡（鳥取市）で見ついているパレットと思われるものは出土していない⁽⁴⁾。

笠見第3遺跡から出土した赤色顔料関連遺物について、個別的に記述するとともに、若干の考察を試みた。弥生時代の赤色顔料が塗られた考古資料は特に珍しいというわけではないが、顔料の種類は何であるかという分析や考察はあっても、その素材がどのようなもので、どのように加工されたうえで用いられたのかといった点に関しては情報が少ないのが現状ではないだろうか。今回の調査でもそのあたりを明らかにできたわけではないが、調査中に見つけた赤黒い石のような塊に注目し、赤色顔料に関連するものではないかとの意識を持って調査を行い、関連資料をまとめて報告できた意義は小さくないと考えている。赤色顔料については、おそらくベンガラであろうとの見通しを持ったわけだが、今回は顔料の種類を特定するに至っていない。今後もこのような資料が蓄積され、自然科学的分析により多くの情報が引き出せるよう期待したい。（湯村）

註

(1) 分析資料のうち石器と顔料素材は、本節に示す。土器は次のとおり。

弥生時代中期の分析資料39は、SK24出土の脚付壺の一部（遺物番号184）。

弥生時代後期の分析資料41は、SI14出土の甕（遺物番号59）。

以上2点は、第3章で報告。

古墳時代前期の赤彩土器は確認できなかったため、弥生時代後期後葉の肩部破片を分析資料40とした。これ自体は小片であり、未報告。外面に多条の波状文、直線文を施し、内面ヘラケズリ調整。

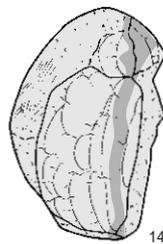
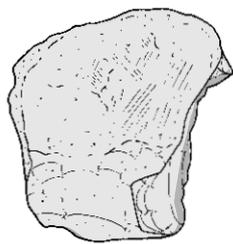
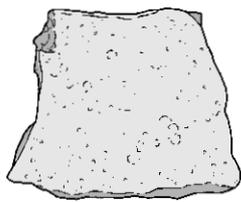
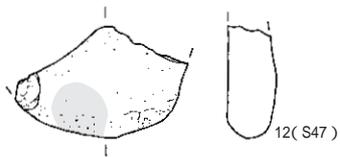
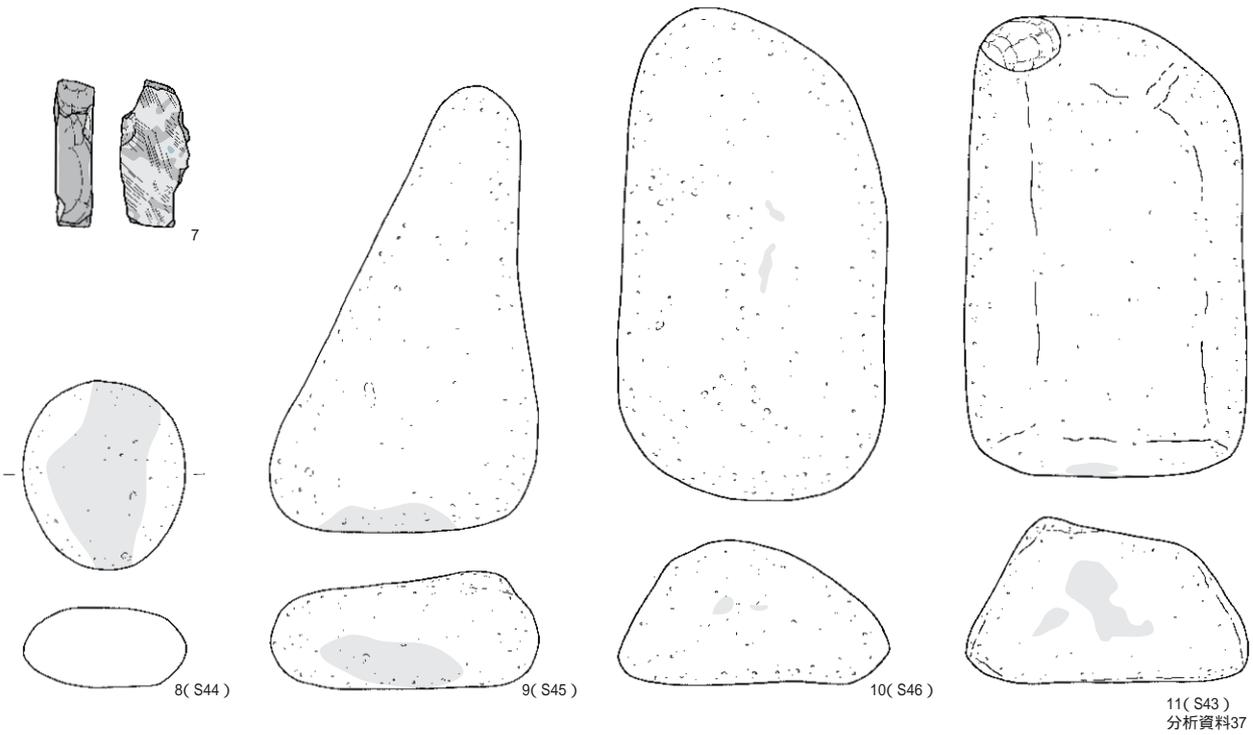
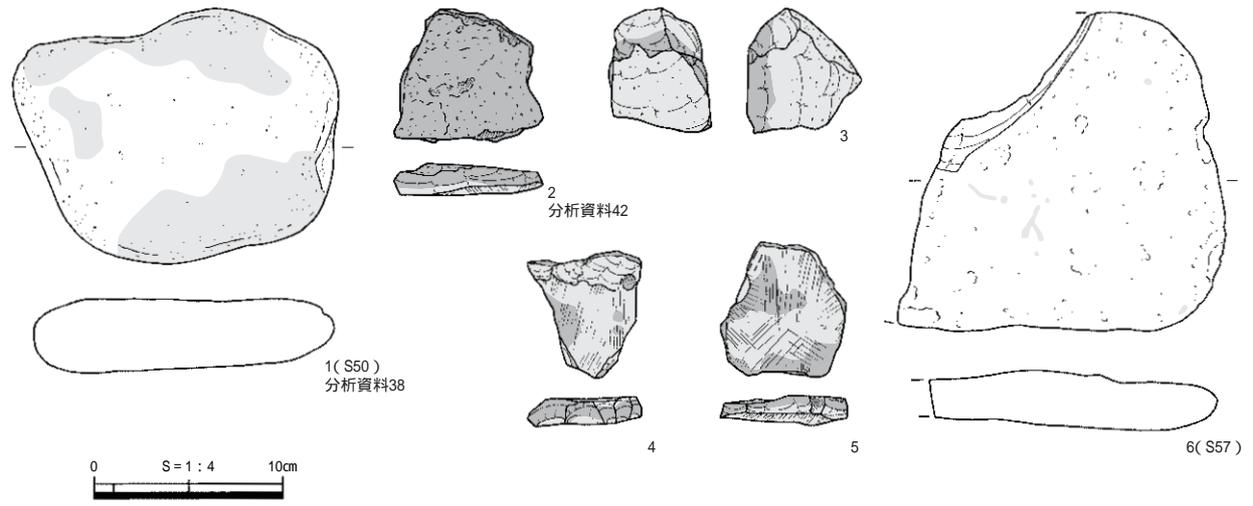
(2) 分析資料41のみは、水銀朱とされた。

(3) 今回、赤色顔料が付着した礫と呼んでいるものは、「赤色塗彩石」と報告されている。

牧本哲雄編2004『笠見第3遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団

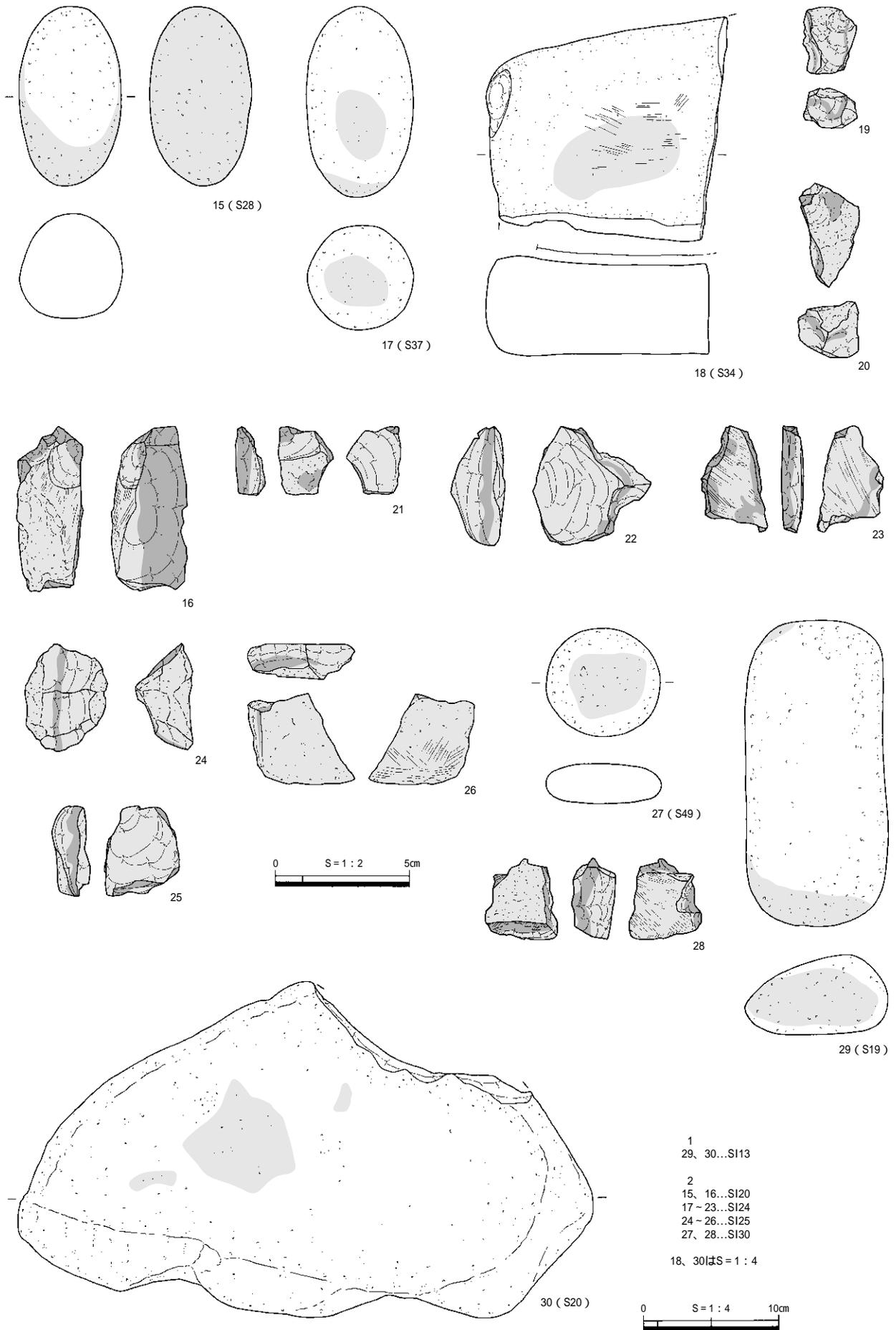
(4) 北浦弘人編2001『青谷上寺地遺跡3』財団法人鳥取県教育文化財団

湯村 功編2002『青谷上寺地遺跡4』財団法人鳥取県教育文化財団

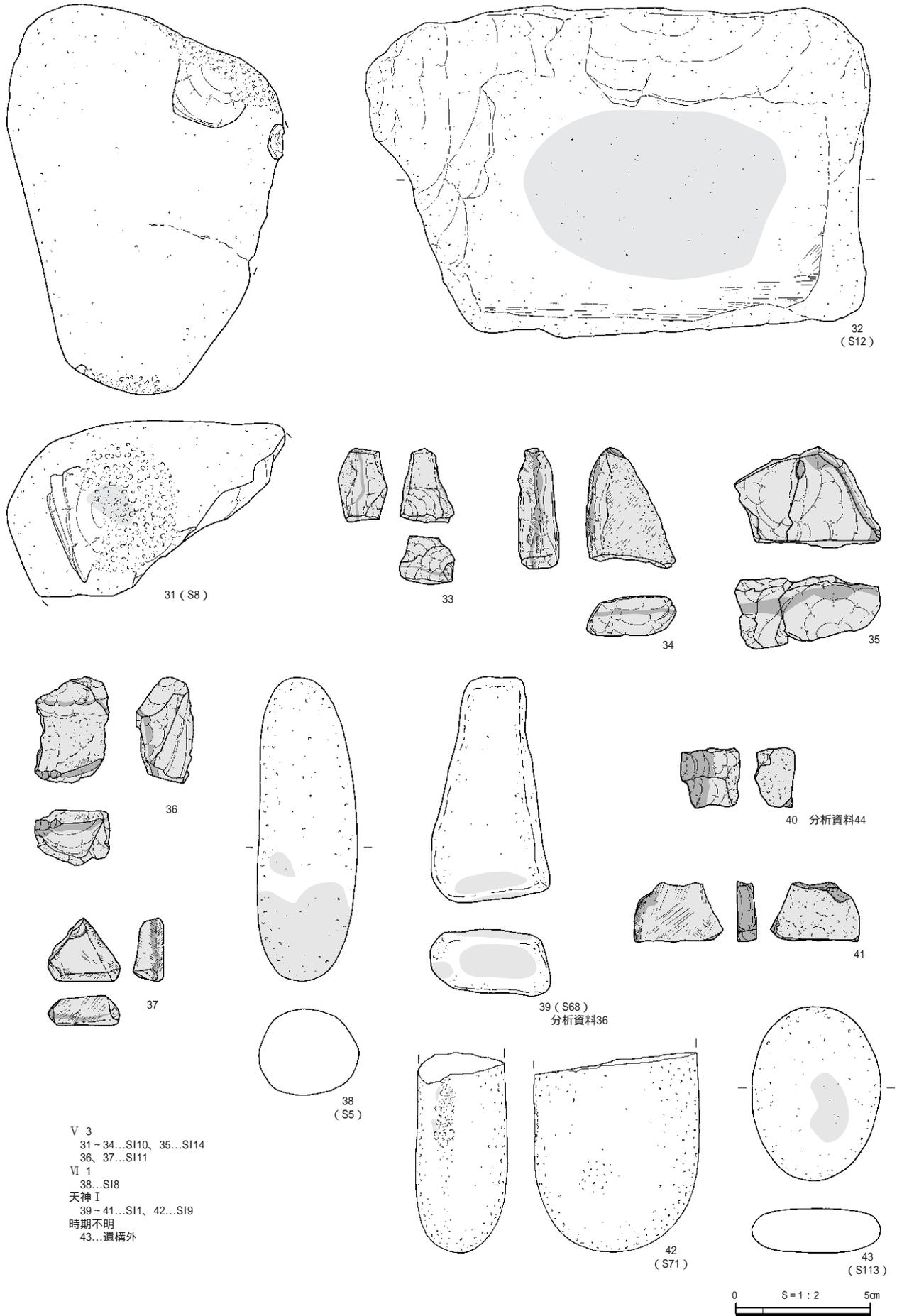


- 3
1...SS2、2...SI21
- 1
3-5...SI12、6...SK39
7...SI18、8-14...SI27
- 赤色顔料付着範囲
顔料素材については、
軟質な部分を示す
- 顔料素材の緻密な部分
を示す

第204図 赤色顔料関連遺物(1)



第205図 赤色顔料関連遺物(2)



第206図 赤色顔料関連遺物(3)

表59 赤色顔料関連遺物集計表

平成18年度調査

時 期	IV 3		V 1					V 2				V 3			
遺 構 名	SI21	SS2	SI12	SI13	SI18	SI23	SI27	SK39	SI20	SI24	SI25	SI30	SI2	SI3	SI4
石 杵				1			3								
台 石		1		1						1					
付 着 礫							2	1	1	1		1			
顔料素材	1		8		3	1	3	1	1	8	4	3	3	1	1
そ の 他										1					
遺構計	1	1	8	2	3	1	8	2	2	11	4	4	3	1	1

時 期	V 3					VI - 1	天神 I		天神 IX		古墳以降	遺構外	器種計
遺 構 名	SI5	SI10	SI11	SI14	SI17	SI8	SI1	SI9	SI26	SI28	SD4		
石 杵		1					1						6
台 石		1											4
付 着 礫						1						1	8
顔料素材	1	2	7	4	1		4	1	3	2	2	8	73
そ の 他													1
遺構計	1	4	7	4	1	1	5	1	3	2	2	9	92

平成14、15年度調査

時 期	V 1		V 2		V 2 ~ V 3	V 3				天神 I	天神 V ~ VI	天神 IX	器種計
遺 構 名	SI42	SI88	SI68	SI89	SI37	SI10	SI75	SI139	SI144	SI14	SI121	SI11	
石 杵													
台 石													
付 着 礫		1		3	2	2	1		1	1		1	12
顔料素材													
そ の 他	1		1					1			1		4
遺構計	1	1	1	3	2	2	1	1	1	1	1	1	16

IV 3 : 弥生時代中期後葉 V 3 : 弥生時代後期後葉 天神 I : 古墳時代前期初頭

V 1 : 弥生時代後期前葉 VI 1 : 弥生時代終末 天神 IX : 古墳時代中期末

V 2 : 弥生時代後期中葉

第3節 まとめ

笠見第3遺跡では延べ3年間、総面積約30,000m²に及ぶ調査が行われた結果、縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡であることが明らかとなった。特に弥生時代中期後葉から古墳時代後期中葉にかけては丘陵上に集落が営まれており、多数の遺構・遺物を検出した。本遺跡周辺の丘陵には銅鐸・銅剣・銅矛の出土が点在しており、そうした背景の中で集落は形成され、拠点性を維持し発展を遂げる。古墳時代以降は断絶期を挟み規模を縮小して集落は営まれ、中期末葉になると集落の一角に鍛冶工房が出現して再び新たな局面を迎えるが、終末期以降は墓地・耕作地へと土地利用のあり方は変質する。

本遺跡の重要性は集落構造を小時期ごとに、多角的に検討することが可能な情報を多分に内包する点にあるといえ、特に古墳時代中期末葉の鍛冶遺構・遺物は高温による本格鍛冶導入以後の地域における鉄器生産の具体相を明らかにする上でも基礎資料になると考える。今後は得られた調査成果を統括して地域史の中に還元させることが重要な責務であり、課題となろう。

最後になりましたが、日々の発掘作業及び整理作業に従事して下さった作業員の方々をはじめ、本調査に御協力いただいた地元の皆様に対し改めて深く感謝申し上げます。 (調査員一同)